

読書筋記三題

吉川 忠夫

ここには、数十年來の読書で得たところの、ささやかな発見かと私かに自負する中から三題を取り上げる。三題はそれぞれ独立したものであり、相互に何の脈絡もない。敢えて言うならば、二種の書物を読み合わせることによって何事かが透けて見えてくるという点に三題共通のテーマが存するということになるうか。なおこの文章は、二〇〇〇の三月末をもって京都大学を退いた私が、それに先立つ三月九日に催された退官記念講演会において話した内容に基づいている。

一 欧陽詢と江総

欧陽詢（五五七〜六四一）は唐初を代表する書家の一人としてすこぶる有名であるが、その人の伝記の冒頭につぎのように記されている。「欧陽詢は潭州臨湘の人、陳の大司空顓の孫なり。父の紇は陳の広州刺史。謀反を以て誅せらる。詢当に従坐すべきも、僅かにして免るることを獲たり。陳の尚書令の江総は紇と旧有れば、之れを収養し、教うるに書計を以てす」（『旧唐書』卷一八九儒学伝上）。

あらためて説くまでもなく、ここに登場する江総（五一九〜五九四。『陳書』卷二七、『南史』卷三六）は、陳王朝の滅亡に深い責任があるとされたほどの大官であり、また陳一代を代表する文学者であった。江総は陳の一代前の梁の時代に生を受けたのだが、梁末の侯景の乱によって江南の地が大混乱に陥ると嶺南の広州に難を避けた。彼がまず頼ったのは舅の広州刺史蕭勃であったが、蕭勃が敗死した後には、歐陽詢の祖父の歐陽紇と父の歐陽紇をパトロンとしてその地で過ごしたのであった。後年、彼はこの流寓の時代のことをつぎのように回想している。「梁の季の不造に値^{あた}つて拙を人間に牧^{やま}い、東は三江に竄^{のが}れ、南は百越に徂^ゆき、秦漢を知らざること十有七年、心迹は退黜し、平生は畢りぬ」（『芸文類聚』卷四八「讓尚書令表」）。百越とはもとより嶺南のこと。歐陽氏（『陳書』卷九、『南史』卷六六）は嶺南を支配するなかば独立の割拠勢力であったのであり、恐らく南海貿易による巨富がその富強を支えたのだと思われる。江総が嶺南から陳の都の建康にもどつたのは、あたかも歐陽頴が歿した天嘉四年（五六三）のこと。歐陽頴の墓誌は江総の撰文にかかり、その人柄がつぎのようにしのばれている。「六経を涉獵し、百氏に優游し、徭を寛くし賦を省きて伯（百）越の帰心を化し、寒きを撫し醪を投じて三軍の死力を感じせしむ。室に在るも賓の如く、寧ぞ屋漏に慙じんや、食らざることを宝と為し、毎^{おの}に人の知らんことを畏る」（『芸文類聚』卷五〇）。しかしそれから七年が経過した太建二年（五七〇）、歐陽紇はその富強をきらつた陳王朝によって謀反の罪を着せられ、陳王朝が差し向けた軍勢の軍門に降つたのである。歐陽氏一族は、歐陽詢をもその一人として建康に連行され、歐陽紇は処刑された。『陳書』卷五宣帝紀太建二年条に、「二月癸未、儀同の章昭達は歐陽紇を擒えて都に送り、建康の市に斬る。広州平らぐ」との記事がある。二月癸未は二月二十九日。

ところで、道宣撰の『広弘明集』巻三〇に「庚寅年二月十二日遊虎丘山精舎」を詩題とする江総の五言詩が収められている。庚寅の年はまさしく太建二年。従つて欧陽紇が処刑された二月二十九日のわずか一七日前の作品にほかならない。その詩にうたうところはつぎのごとくである。「棹を縦ちて迴曲を憐れみ、山を尋ねて見聞を静む。毎に芳杜の性に従い、須らく俗人と分るべし。貝塔は流れに涵りて動き、花台は領（嶺）に偏りて芬る。蒙籠として簷を出ずる桂、散漫として窓を繞る雲。情は幽にして豈に物に徇わんや、志は遠くして群に驚き易し。何に由つてか魚鳥に狎らう、玄纁に屈するを願わざればなり」。恐らく江総は、クリークを舟に揺られながら呉の虎丘山を訪れたのであろう。そしてこの詩は、虎丘山を訪れての清浄な境地をうたうだけのもののようにも思われる。しかしながら『広弘明集』がこの詩を収めたうえ、「江令公集に云わく」として、つまり江総の文集からの引用としてつぎの話を載せていることをいかに理解すべきなのであろうか。

廬山の遠法師の未だ出家せざりしとき、弩射を善くす。嘗つて鶴の窟に於いて鶴の雛を射得す。後に復た鶴の母を伺い、見て將に之れを射んとするや、鶴は翔を動かさず。之れを覩るに已に窠の中に死す。其の子を愛して死を致せしかと疑い、破りて心腸を視るに皆な寸絶す。法師は是に於いて弩を放ちて菩提心を発す。

可憐な雛鶴の死。凄絶な死を遂げた母鶴。詩の後にこのような話がわざわざ引かれているのは、詩が作られた背景を暗示しようとしてのことと考えなければ理解できない。雛鶴には少年欧陽詢の姿が、母鶴には恐らく父親の欧陽紇と運命をともにすることとなった母親の姿が二重写しになっているのではないか。ただ違うのは、犠牲となつた雛鶴とは異なつて欧陽詢の命が助かつたことである。江総は広州滞在時の恩義に感じて、欧陽氏一族の処刑が執行されるに先立ち、密かに欧陽詢を虎丘寺に匿つたのではないか。『旧唐書』の欧陽詢伝が「僅かにし

て免るることを獲たり」とそつげなく記しているだけの記事をこのようにふくらませてみてもよいのではあるまいか。欧陽詢にとつて江総はまぎれもなく命の恩人であったのであり、そのことを考えるならば、彼の編纂にかかる『芸文類聚』に江総の詩文が少なからず採択されているのも故なしとはしないのである。

二 『劉子』の著者は劉晔

『劉子』あるいは『新論』とよばれて伝わる書物の著者は誰なのであろうか。『劉子』に詳密な注釈を施した王叔岷氏の『劉子集証』（中央研究院歷史語言研究所專刊之四十四、一九六一年）がその自序で指摘しているように、これまでこの書物の著者の候補として挙げられてきたのは、前漢末の劉歆、梁の劉勰、劉孝標、それに北齊の劉晔の四人であつた。これら四人のうちから、劉歆は論外として除かなければならない。というのも、『劉子』の文章はとても漢代のものとは思われず、それに何よりも『劉子』には劉歆以後の故実典故が散見するからである。残る三人の中で最も有力視されているのは劉晔であり、余嘉錫氏の『四庫提要辨証』は子部五雜家類にその書物を「劉子十卷、劉晔撰」と明記して著録したうえつぎのように論じている。

「案ずるに、晔、陳自^より以下、此の書を題して劉晔撰と為す者は、大抵袁孝政の序に拠る」。晔とは晁公武の『郡齋讀書志』であつて、その卷一二（衢本）雜家類に言う。「劉子三卷。右、齊の劉晔孔昭撰。唐の袁（孝）政注。凡そ五十五篇。修心治身の道を言うも、而るに辞頗る俗薄なり。或いは以て劉勰と為し、或いは以て劉孝

標と為す。未だ孰れか是なるやを知らず」。また陳とは陳振孫の『直齋書錄解題』であつて、その卷一〇「雜家類」に言う。「劉子五卷。劉晝孔昭撰。播州録事參軍袁孝政、為に序す。凡そ五十五篇。案ずるに唐志にては十卷、劉勰撰と。今序に云わく、『晝は己れ不遇にして天下陵遲するを傷み、江表に播遷し、故に此の晝を作る。時人は知ること莫く、謂いて劉勰と為し、或いは劉歆、劉孝標の作と曰う』。孝政の言に爾しか云うも、終に晝の何代の人為るかを知らず。其の晝は近くして出で、伝記に稱すること無ければ、其の始末を詳らかにすること莫し。知らず、何を以てか其の名は晝にして字は孔昭なるかを」。さて余氏はつづけて論じて言う。「余嘗つて疑うらく、孝政が注を作るとは文理尚お復た通ぜず、其の言、豈に摠と為すに足らんやと。既にして之れを考え、始めて知る、初唐の時の人に早に此の説有ることを。宋の劉克莊の『後村大全集』卷一百七十九「詩話統集」に『朝野僉載』を引いて云わく、『劉子の晝、咸な以て劉勰の撰する所と為すも、乃ち渤海の劉晝の製する所なり。晝は位無きも、博学にして才有れば、窃みて其の名を取り、人は知ること莫きなり』。然らば則ち此の晝は實に晝の撰する所なり。晝は才有るも位無く、積たまりねて時人の軽んずる所と為る。故に発憤して此れを著し、劉彦和（劉勰）の名を窃み用いて以て其の晝を行い、且つ以て當時の忌諱を避くるなり。人は既に知ること莫く、故に兩唐志及び諸伝本は皆な劉勰と題す。『朝野僉載』は唐の張鷟の著す所為り。鷟は高宗の調露の時の進士にして博学にして才有り。且つ北齊を去ること未だ遠からざれば、その言必ず本づく所有つて自ずから信を取るに足る」。

陳振孫は「晝の何代の人為るかを知らず」と言っているけれども、明らかに失檢であつて、劉晝の伝記は『北齊書』卷四四と『北史』卷八一の儒林伝に備わる。そのあらましを摘むならば――、

劉晝、字は孔昭。渤海阜城の人。同郷の李宝鼎（鉉）から三礼を、河間の馬敬徳から『服氏春秋』を授かつて

その大義に通じたが、片田舎の阜城には書物の少ないことを恨みとし、都の蔵書家の宋世良のもとに出かけてその子の家庭教師となり、読書に精励した。その後、河清年間（五六二〜五六五）に秀才に挙げられたものの考策第せず、一念発起して文学修行を開始する。「六合」を題とする賦一首を作つて得意満面、「儒者の勞して工少なきこと斯に見たり。我は儒書を読むこと二十余年なりしも、而るに答策して第せず。始めて文を作ることを学び、便ち是の如きを得たり」とうそぶき、その賦を魏収に呈するが、「賦をば六合と名づくるは其の愚已に甚だし。

其の賦を見るに及んでは又た名よりも愚なり」と、さんざんな評を得るだけの結果に終わる。かくして彼は、『高才不遇伝』を著して自分が世に認められない憤懣を託した。またしきりに孝昭帝に上書しながら採択されるところとならなかつた文章を自ら編録して『帝道』と名づけたほか、「機政の良からざる」ことを指弾する『金箱壁言』を著し、「我が数十巻の書をして後世に行わしむれば、齊景（齊の景公）の千駟にも易えざるなり」、このように大言壮語するのが平生の口ぐせであつたという。天統年間（五六五〜五六九）に五十二歳で卒した。

王叔岷氏もこの劉晝が『劉子』の著者として限りなくくさいとにらんでいるのだが、ただ残念ながら状況証拠にとどまつていと言わざるを得ない。ところが『広弘明集』の巻六に、『劉子』の著者は劉晝であるに違いない決定的な証拠が見つかるのだ。『広弘明集』の巻六ならびにまた巻七は「叙列代王臣滯惑解」と題され、その篇において道宣は、唐初の傳奘が著した排仏家の伝記と称すべき『高識伝』の文章を適当に摘みながら反駁を加えているのだが、『高識伝』に集められていた排仏家二五人の中の一人が実は劉晝なのであつた。『広弘明集』につきのようにある。

劉晝は渤海の出身。才能學問は身過ぎとするに足るほどのものではなく、北齊は仕官することを許さなかつ

たため、『高才不遇伝』を著して自らの境遇になぞらえた。彼は上書して、「仏法はいんちきでたらめ、徭役忌避者たちが巢窟とされている」と述べたうえ、さらにその淫蕩ぶりをつぎのように激しく罵った。「尼がおり、優婆夷がいるが、実は彼女たちは僧侶の妻妾なのであり、胎児を損ない殺しているのであって、その惨状は筆舌に尽くしがたい。現在、尼僧の数は二百万人ほど、それに在家の女性信者は四百万人余りになる。とするが、六箇月に一度の割合で胎児を損なうとすると、つまり一年間で二百万戸を族滅していることになる。これが証拠に、仏は胎児にとつての疫病神なのであって、聖人であるなどとはとんでもないことである」。彼はまたつぎのようにも述べた。「道士は老荘の本来の道を踏みはずして仏の邪説にすがり、その脇士の役をつとめているに過ぎない」。

劉晝の上書は、余嘉錫氏も言っているように、そもそもは恐らく『帝道』に載せられていたものであつたらう。上品な議論とはとても言えないが、劉晝の上書の最大の眼目は、僧侶は尼僧と優婆夷すなわち在家の女性信者を妻妾としてはらませておきながら、密かに墮胎を行わせているという点に存する。尼僧二百万人、優婆夷四百万人、合わせて六百万人、六箇月に一度墮胎が行われるとすると、一年間で一千二百万人の生命が損われ、一戸が六人をもつて構成されるとすると、二百万戸の人口が族滅されていることになる、という計算なのだ。兵役と徭役の基礎となるべき戸口がかくも大量に失われ、その結果、富国強兵への道が阻害されていると劉晝は言いたいのである。

さて道宣は傳奕の『高識伝』の劉晝の章を以上のように摘んだうえ、つぎのように反論している。

劉晝の右の言葉を検討してみると、ことさらに人の耳目を汚すものであつて、墮胎と嬰兒殺しのことばかり

を述べたてているが、まっとうな人間の発言であろうか。孔子は人の一つの美点を見つけるとその人の百の欠点を忘れ、鮑生（鮑叔牙）は人の一つの悪事を見つけると終生忘れることがなかつたという。寛大と狹量のありようがここにはつきりと見て取れるのであって、狂人と賢哲の心は遠くかけ離れているのである。してみると、天下の高尚な沙門は百万人を逾え、財物や女色には目もくれず、名譽や地位とは縁もゆかりもないのに、（劉晝は）このような徳は隠蔽し、淫蕩であるとか人殺しであるとか、ありもせぬことばかりを誇張しているのだ。一年に二人の嬰兒を殺すことを、沙門についてひとまずそうだと仮定してみるとしても、一年に二人の子供をもうけるなんてことが、一般庶民の中の誰に可能であろうか。発言はとりとめもなく、世間に広めるに値しない。⁴⁵

「孔子は人の一つの美点を見つけると」云々と訳した一段の原文は、「孔子見人一善而忘其百非、鮑生見人一惡而終身不忘、弘隘之迹、斷可知矣、狂哲之心、相去遠矣」のだが、実はこの一段こそが『劉子』の著者は劉晝であることの動かぬ証拠となるのである。というのも、『劉子』の妄瑕篇に、道宣が下敷きにしたとしか思えないこれとほとんど同じ文章が発見されるからだ。すなわち齊の桓公について、「諸侯を九合し、天下を一匡し、桓公は善く士を求むと謂う可し」と述べたうえ、つぎのように言うのがそれである。「故仲尼見人一善而忘其百非、鮑叔聞人一過而終身不忘、夫子如斯之弘、鮑叔如斯之隘也、以是觀之、聖哲之量、相去遠矣」。

『劉子集証』が指摘しているように、孔子の典故は『説苑』雜言篇や『孔子家語』六本篇に、鮑叔牙の典故は『莊子』徐无鬼篇や『列子』力命篇、『管子』戒篇、『呂氏春秋』貴公篇等にそれぞれ単独で現れはするけれども、二つの典故を一对にして用いたのは『劉子』の発案にかかるのである。そしてそれを道宣がほとんどそのままに

用いているのであって、偶然の一致とはとても考えられない。

もはや明らかなように、道宣が「叙列代王臣滯惑解」の劉晝の章に右に見たような反論を書きつけたのは、道宣にとつて『劉子』の著者は劉晝であることが自明であつたからに違いない。汝は著書の中でご立派なことを述べておきながら、仏教に対する誹謗は何ともひどいものだ、鮑叔牙と同様にまったく狭量な態度ではないか、というわけだ。相手を批判するに当つて、相手の言説を持ち出して揚げ足を取り、相手をあてこすることはほど効果的で意地の悪いやり方はほかにないのではあるまいか。

三 曇鸞と陶弘景

中国浄土教の祖師である北魏の曇鸞（四七六～五四二）。『統高僧伝』卷六義解篇は、『大集経』に注釈を施す仕事に取りかかったものの、業なかばにして気疾の病にとりつかれた。そのため仕事をいったん中断し、治療のために各地を巡る。そして汾州の秦陵故城までやつて来て城の東門を入つた時のこと、大空を見上げると、突如として天門がからりと開けるのが見え、そこに六欲の階位が上下に重なるさまがありありと認められたのであつた。六欲とは欲界の六欲天、すなわち四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天。そのさまを見たことで曇鸞の病は不思議に癒え、『大集経』注釈の仕事を開しようと思ひたつたのだが、そこでふとこう考えた。「命は惟れ危脆にして其の常を定めず。本草の諸経は具さに正治を明らかにし、長年の神仙、往往にし

て聞出す。心願の指す所、斯の法を修習せん。果して剋くすること既に已つて方めて仏教を崇むるも亦た善からざらんや」。その頃、江南の梁の陶弘景の名声は華北の地にも聞こえており、そこで曇鸞は陶弘景を頼つて江南へ赴くこととしたのであった。陶弘景（四五六―五三六）は健康の東南の茅山を本山とするところの上清派道教の宗師であつて、上清經典の蒐集と整理につとめるとともに、本草の知識もなみなみならぬものがあつたのである。

江南にやつて来た曇鸞はまず梁の宮城の城門をたたき、最初は「細作」すなわちスパイかとの疑いをもたれるが、やがて疑いも晴れて梁の武帝との会見がかなう。武帝の問いに、曇鸞が「仏法を学ばんと欲するも年命の促減なることを恨みとし、故に來つて遠く陶隱居（弘景）に造つて諸々の仙術を求めんとす」と答えると、「此れは世に傲れる遁隱者にして、比ちかごろ屢ば徵せども就かず。往きて之れに造るに任さん」とのこと。やがて曇鸞が陶弘景に書問を通ずると、つぎの返書が送られてきた。「去る月、耳に音声（評判）を聞き、茲の辰、眼に文字を受く。將まさに頂礼すること歳をば積かさぬるに由つて、故に応真（阿羅漢）をして來儀せしむ。正爾に藤蒲を整とし、花水を具陳し、襟ただを端し思ひを斂ひそめ、警錫を聆かんことをとす」。陶弘景は道教の宗師ではあつたものの、夢の中で仏から菩提記を授かつて勝力菩薩と名のり、はるばる鄞県の阿育王塔に出かけて自誓受戒したように（『梁書』卷五一処士伝）、仏教との因縁も浅からぬものがあつたのである。

さて茅山を訪れた曇鸞は、陶弘景から仙經十卷を授かると意気揚々と華北に引きあげ、名山にこもつて仙經の処方のままに長生にはげもうと考へた。そんな折も折、洛陽において菩提留支三蔵に出会ふ。「仏法中に頗る長生不死の法の此の土の仙經に勝る者有らんや」、このように曇鸞は誇らしげに語つたが、菩提留支はべつと睡を

吐いて言うのであった。「是れ何の言ぞ歟。相い比するには非ざるなり。此の方の何処に長生不死の法有らんや。縦い長年を得るとも、少時死せざるのみにして、終には更に三有（三界）を輪廻するのみ」。そしてそのうえで『観經』を授け、「此れぞ大仙方なり。之れに依つて修行せば当に生死を解脱することを得べし」と教えたのであった。かくして曇鸞はありがたく『観經』を頂戴し、持っていた仙經のすべてを火にくべて焼き捨てた。『正信偈』に「三藏流支授淨經、焚燒仙經歸樂邦」とうたわれている一段の基づくところでもある。

ところがしかし何としたことか、曇鸞の代表的著作である『淨土論註』に曇鸞がすべてを焼却したはずの仙經のまぎれもない痕跡がありありと見出されるのであって、すこぶる興味深いこととしなければならぬ。すなわち、諸仏菩薩の名号を唱えることなどの御利益を説いた一段につきのようにあるのがそれである。

たとえば禁腫辭（腫れもの封じの呪文）に、日出東方乍赤乍黄（日は東方に出で、乍は赤く乍は黄なり）などとの文句があるが、たとい酉亥（北北西）の方角に向かつてまじないを行つても、日が出ているかどうかに関わらず、腫れものはなおる。またたとえば軍事行動を起して対陣する場合、ただあらゆる齒の中で、臨兵闘者皆陣列在前行（兵に臨んで闘う者は皆な陣列して前行に在り）というこの九字を誦えるならば、あらゆる武器にやられることがない。『抱朴子』が要道とよんでいるものである。また転筋（こむらがえり）に悩む者は木瓜を火の前であぶればなおる。またなかには、ただ木瓜の名を呼ぶだけでなおる者もある。私自身やってみて効き目があった。このような卑近なことからは、世間の者がみんな知っている。ましてや不可思議境界のものならばなおさらのことだ。

『抱朴子』は登涉篇。呪文が置かれているコンテキストは『淨土論註』とはいささか異なり、また「在」の一

字がないが、九字というのだからその方がよい。すなわち、「山に入るには宜しく六甲秘祝を知るべし。祝して曰わく、臨兵闘者皆陣列前行と。凡そ九字をば常に当に密かに之れを祝すべし。辟けざる所無し。要道は煩ならずとは此れの謂なり」。そして木瓜と転筋のこと、ほかならぬ陶弘景の『本草集注』の果部「木瓜」の項につきの記事が見出されるのだ。「木瓜実。味は酸、温、無毒。湿痺、邪氣、霍乱、大吐下、転筋の止まざるを主る。其の枝も亦た煮て用う可し」という本文に陶弘景が施した注釈である。「山陰の蘭亭に尤も多し。彼の人は以て良薬と為す。最も転筋を療し、如し転筋の時には但だ其の名を呼び及び書上に木瓜の字を作るのみにても皆な愈ゆと。理亦た尋ね解す可からず。俗人は木瓜の杖を拄き、筋脛を利すと云う」。『浄土論註』の木瓜の効果についての記事がこの『本草集注』の記事に依拠していることはほとんど疑いがないであろう。転筋が起こった際の木瓜の効果について、陶弘景は「理亦た尋ね解す可からず」といささか懐疑的なのだが、曇鸞はむしろ信じきっている様子がうかがわれるのが面白い。ともかく曇鸞は『抱朴子』や『本草集注』を引用しているのであって、とするならば、彼が菩提留支に出会って陶弘景から授かった仙經のすべてを焼き捨てたというのは疑わしく思われてくるのだ。

ほかにも気になることがないではない。『雲笈七籤』の「諸家氣法」の項には、「曇鸞法師服氣法」と「達磨大師住世留形内真妙用訣」の仏教の沙門の名を冠した服氣法二種が収められている(巻五九)。そのうちの達磨の名を冠した妙用訣は、そもそも達磨が西国から中国に赴くに当って師の宝冠から授かったとのふれこみのものがあり、胎息の呼吸法を骨子とするが、圓悟克勤にそれが達磨に仮託された贋作に過ぎぬことを論じた一文がある。その名もずばり「妄伝達磨胎息論を破す」(『語録』巻二〇)。圓悟の論ずるところによれば、釈迦に始まり西天

と東土の祖師たちによって脈々と伝えられた禅の教えは、「直指人心、見性成仏」を説くだけであつて、「階梯を立てず、知見を生ぜず」、何らかの手段を設けたり、はからいの心を生じたりするものではない。このように強調したうえ、圓悟は野狐の禪者たちを叱責しているのだ。「彼らは祖師たちを夢にすら見たことがないくせに、達磨は胎息の法を人々に伝えたなどと妄伝し、法を伝え迷情を救うとはこのことなのだと言っている。はては昔の長寿の宗師の安国師や趙州和尚のことを持ち出して、二人はこの服氣法を実践したのだとか、初祖達磨の隻履や普化の空棺のことを自慢して、この術には効果があるのだと言っている」。

「法を伝え迷情を救う」は達磨が二祖慧可に示した偈の一句。安国師とは百二十八歳で入寂し、老安国師と称された嵩嶽慧安。趙州從諗も百二十歳の長寿であつた。達磨の隻履とは、熊耳山に葬られたはずの達磨がサンダルの片方だけを携えてバミールの山中を歩いているのを見かけた者があり、達磨の墓を開いてみたところ、屍はなくしてサンダルの片方が残されていたという話。普化の空棺というのも、やはり同様に普化和尚の棺桶の中に屍がなかったという話であつて、いずれも道教の尸解仙の觀念に基づく形象化とすべきものである。

かく圓悟が論破しているように、「達磨大師住世留形内真妙用訣」はたしかに贗作に過ぎぬのであろう。だが一方の「曇鸞法師服氣法」はどうなのか。

初め寛坐し、両手を伸ばして膝の上に置き、衣帯を解き、肢体を放縱にし、法性平等、生死不二なることを念ず。半食頃を経て目を閉じ舌を挙げて腭に奉じ、徐徐に長く気を吐くこと一息二息、傍の人は気の出入の声を聞く。始めは麁にして漸く細なること十余息、後に乃ち自ら声を聞くことを得。凡そ痛痒の処有るを覺ゆれば便ち中従り出ずるを想う。但だ異有るを覺ゆれば漸漸に長く気を吐き、細従り麁に至ること十息、後

に還た初めの如くす。……四大の不調に二有り。或いは外、或いは内。寒熱飢虚飽飢疲勞を外起と為し、名利喜怒声色滋味念慮を内起と為す。凡そ氣の節量は一に自然に任せ、綿綿として存するが若く、之れを用いて勤れざるのみ。但だ能く生を以て生と為さざれば、乃ち養生に賢るなり。

これが曇鸞の真作であるとの保証はない。だがかと言って、右に見たような曇鸞を取り巻く状況を考えるならば、道教百科全書とでも言うべき『雲笈七籤』の中に収められていても何の違和感もない。それにそもそも仏教には数息観という観法が存在し、「曇鸞法師服氣法」はその流れを汲むものなのだ。

最後に閑話のまた閑話を一つ。『南史』巻五三梁武帝諸子伝の武帝の第二子、子章王蕭綜の伝記につきの記事がある。蕭綜の母親はもと南斉の東昏侯の後宮の女性であったのだが、斉梁王朝交代の後にあらためて武帝の寵愛を受けることとなった。だが王朝交代から七箇月で綜が生まれたためにとかくの噂がたち、成人した綜もそのことを思い悩むようになった。やがて南兗州刺史として広陵に赴任した綜は、密かに北魏への亡命を計画し、すでに先立って亡命を果していたもとの南斉の建安王蕭宝寅と緊密に連絡を取りあうこととなる。その時に当って、綜の隠密の使者の役目をつとめ、何度も往来を重ねたのは、法鸞と名のるところの広陵に住する北来の道人であったという。周知のごとく、南北朝の分裂の時代においても、仏教の僧侶にかぎって中国の南北を自由に往来することができたのだが、しかしこれはまったくの細作の行為というべきものであろう。先に述べたように、梁の宮城を訪れた曇鸞は細作かと疑われたと伝えられているのであって、法鸞と曇鸞はひよっとして同一人なのではないかとの想像をたくましくしたくもなるのだ。僧侶の名の頭の字が入れ代るのはよくあることである。法鸞が梁と北魏との間を足しげく往来したのは普通四年（五二三）前後のこと、そして『統高僧伝』によれば、曇鸞が

江南にやって来たのは大通年間(五二七く五二九)のことであつたという。だが恐らくこれは、あまりにも放恣な想像にしか過ぎないのであろう。

注

- (1) 以上に述べたこと、拙稿「嶺南の歐陽氏」(谷川道雄氏を代表者とする科研成果報告書『中国辺境社会の歴史的研究』、一九八九年)をあわせて参照されたい。
- (2) 中津浜涉編『芸文類聚引書引得』(一九七二年)の「作者索引」の項を参照。
- (3) 齊景の千駟の基づくところは、『論語』季氏篇。「齊景公有馬千駟、死之日、民無德而称焉」。
- (4) 原文「劉晝、渤海人、才術不能自給、齊不仕之、著高才不遇伝以自況也、上書言、仏法詭誕、避役者以為林藪、又詆訶淫蕩、有尼有優婆夷、實是僧之妻妾、損胎殺子、其狀難言、今僧尼二百許万、并俗女向有四百余万、六月一損胎、如是則年族二百万戸矣、驗此仏是疫胎之鬼也、全非聖人、亦言、道士非老荘之本、籍仏邪説、為其配坐而已」。
- (5) 原文「詳書此言、殊塵聽視、專言墮胎殺子、豈是正士言哉、孔子見人一善而忘其百非、鮑生見人一惡而終身不忘、弘隘之迹、断可知矣、狂哲之心、相去遠矣、然則天下高尚沙門、有逾百万、財色不顧、名位莫縁、斯德隱之、妄張姪殺、一年誅二子、沙門且然、一歲有二男、編戸誰是、吐言孟浪、未足広之」。
- (6) 船山徹「陶弘景と仏教の戒律」(吉川忠夫編『六朝道教の研究』、春秋社、一九九八年)、参照。
- (7) 原文「諸法万差、不可一概、有名即法、有名異法、名即法者、諸仏菩薩名号般若波羅蜜及陀羅尼章句禁咒音辞等是也、如

禁腫辞云日出東方乍赤乍黃等句、仮使酉亥行禁、不闕日出而腫得差、亦如行師對陣、但一切鹵中誦臨兵闔者皆陣列在前行、誦此九字、五兵之所不中、抱朴子謂之要道者也、又苦軀筋者、以木瓜對火熨之則愈、復有人但呼木瓜名亦愈、吾身得其効也、如斯近事、世間共知、況不可思議境界者乎」。

(8) 曹植の「桂之樹行」につぎの句がある。「桂之樹、得道之真人咸來會講、仙教爾服食日精、要道甚省不煩、澹泊無為自然」。

(9) 『本草集注』については、麥谷邦夫「陶弘景の医薬学と道教」(吉川編『六朝道教の研究』)を参照。

(10) 原文「嗟見一流拍盲野狐種族、自不曾夢見祖師、却妄伝達磨以胎息伝人、謂之伝法救迷情、以至引從上最年高宗師如安国師趙州之類、皆行此氣、及誇初祖隻履普化空棺、皆謂此術有驗」。